

プロローグ

本書は、文字通り、「**国民のための戦史教科書**」をめざしたものである。明治・大正の昔、お祖父さんは、囲炉裏にあたりながら、従軍した日清・日露の戦いを孫達に語ったものである。これは、ただ一国、日本という反戦思想が蔓延する異常な国を除いて、今も世界の民族では常識である。

祖父は、そして、父は、子に孫に、民族の英雄物語を、自慢話として語るものである。本書が、民族の英雄物語を語るための教科書となれば幸いである。

■戦争は民族の栄光であり、同時に、苦難である。

戦争はみずから欲して起きるものではない。国家が危機に陥った時、政治の手段として戦争は勃発する。祖国を守るために、男も女も、老いも若きも、銃をとって立ち上がる。

ゆえに、戦争は民族の雄々しき戦いの記録であり、英雄物語となる。**戦史とは、祖国を守るために、一身を投げ出した英雄達の獅子奮迅の戦いの記録である。**

■戦争は民族の活力を高める。

明治以来の日本人が偉大だったのは、戦争を受けて立つ民族だったからである。戦後日本を経済大国にしたのは、あの大東亜戦争を戦った明治・大正人であった。同一条件ならば世界最強の軍隊であり兵隊だった。

すなわち、世界最強の競争力をもっていた。戦争を知らない世代、そして、戦争を忌避する日本人が増えるとともに、日本は急速に競争力を喪失していった。**平和とは「無競争」と同義語である。**天敵がいなかったために、飛ぶ能力を退化させた鳥と同じである。

■戦争は民族をそして個人をきびしく鍛える。

戦争は民族と個人を強い人間にする。戦争が強い国家を作りあげる。明治以来の日本を世界の大国とした源泉は戦争である。戦争を通じて日本民族は、世界に冠たる民族となった。これは良いも悪いもない。世界史の事実である。

すなわち、戦争によって、ローマ帝国は世界帝国となった。戦争

によって大英帝国は世界の七つの海を支配した。戦争によって、アメリカは、超大国となった。皮肉だが、アメリカを世界一の超大国にしたのは日本である。アメリカ人は、大東亜戦争を通じて、日本人によってきびしく鍛えられたのだ。臆病なアメリカ兵を鍛えて、無敵の米海兵隊をつくりあげたのは、対戦した我が父祖たちの無敵皇軍である。日本人よ、胸をはれといたい。

シナ中国は、戦争に弱かったゆえに、世界列強の侵略を受けた。今、日本はシナ中国と同じ轍を踏もうとしている。戦争を忌避し、反戦思想が蔓延する日本は、今、国家としての没落の危機にある。

戦争は悪でもなく善でもない。戦争は人類の宿痾として、そして、政治の手段として、永久になくならない。人類があるかぎり、戦争は起こり続けるだろう。

■なぜ、戦史を研究するのか。

戦略能力の学習のためである。 戦略能力がないゆえに大東亜戦争は勃発し、戦略能力がないゆえに大敗を喫した。そして、平成の今、戦略能力がないゆえに、失われた十年どころか、二十年という、経済が縮小するデフレスパイラルの非常事態にある。

本書は、私たちの父・母の雄々しき戦いの記録、すなわち、民族の英雄物語を、多くの日本人に読んでいただき、日本人の偉大さと強さを、後世に伝えることを目的としている。

本書が完成するまでに多くの人のご支援ご協力がありました。次頁にお名前を記し心より御礼を申し上げます。とくに、戦史研究会の会員とは、この本が完成するまで苦楽をともにしました。厚く御礼申し上げます。

平成21年12月8日

「戦史研究会」代表 北岡俊明

■戦史研究会・共同執筆者

青木 恒 長谷川賢二 押田信昭 竹内勇人 正木 隆
塚越幹夫 江原 裕 金井健司 小出大和 柳澤賢治
宇野英明 黒崎 浩 辻 俊昭

★この戦史教科書は戦史研究会の総力を結集して制作した。とくに、本

書のビジュアル化は会員の高度な技術の成果である。

■戦史研究会・協力会員

土田朝美 斎藤広樹 河村宣行 近藤次美 宮村啓路（在ドイツ）
宮内康行（在インド） 米岡雄一 梶 俊明 岡本尚胤 長沢栄一
斎藤永視 松元俊夫 佐藤祥一

■お世話になった先生がた

小野田寛郎先生

小野田町枝様

小室直樹先生

伊原吉之助先生（手塚山大学名誉教授）

恩田彰先生（東洋大学名誉教授・創造学界名誉会長）

中條高德先生（朝日ビール名誉顧問）

桜井邦朋先生（元神奈川大学学長）

谷光太郎先生（大阪成蹊大学教授）

荒木和博先生（拓殖大学教授）

水野紘之介先生（経済評論家）

北岡正敏先生（神奈川大学教授）

「国民のための戦史教科書」

目 次

第 1 章

ノモンハン戦

★帝国陸軍が最強だった時代★

- ノモンハン事件は戦争だった I - 1
- ノモンハン戦の経過 I - 2
- 詳細な戦争経過 I - 5
 - 第一次ノモンハン戦／第二次ノモンハン戦
- ノモンハン戦の功罪 I - 11
 - なぜ、ノモンハン戦は起きたか／ソ連軍の巧妙な情報戦略／
 - スターリンの戦略にひっかかった／自虐史観に汚染された戦史家
 - 達／甚大なソ連軍の人的損失／当時の日本陸軍は無敵皇軍といわ
 - れるほど強かった／戦闘に勝ち、戦略に負けた日本／
 - 戦術家はいるが、戦略家はいない・・・ノモンハンの反省と戦訓／
 - 日本の運命を決めた二つの戦略論争／陸軍の北進論対海軍の南進
 - 論／
 - 南進が日本を破滅させた
- 石坂辰雄准尉 I - 26

第 2 章

支那事変（日中戦争）

★無敵皇軍・不敗の戦場★

- 根本誤謬としての支那事変 II - 1
 - 日本と中国の関係史
- 盧溝橋事件・・・なぜ支那事変は泥沼と化したのか II - 4
 - 盧溝橋における銃声
- 石原莞爾の蹉跌 II - 7
 - 拡大派の暴走／ついに第二次上海事件に発展
- 南京攻略戦 II - 10
 - 蒋介石を相手とせず

■ 支那事変の原因	II - 15
激しい排日・侮日／荒木大尉の無念（第一次南京事件）／暴支膺懲／	
■ 支那事変の戦い方<イフの歴史>	II - 21
一ヶ月で南京を占領する／寛大な講和により中国から撤退する／	
満州国の建国に邁進する	
■ なぜ、支那事変は終わらなかったのか	II - 25
■ 戦史余話その2・・・通州事件と尼港事件	II - 27
■ 戦史余話その3・・・第18師団そして日本の師団	II - 28
■ 日本軍の組織論・・・精強の秘訣	II - 28

第3章

ハワイ真珠湾作戦

★軍事上の技術革新をなし遂げた父祖達★

■ わが父祖達の偉大な物語	III - 1
■ 軍事上の一大革命であった	III - 1
■ 真珠湾攻撃の目的	III - 2
■ 軍令部の猛反対	III - 4
■ 月月火水木金金	III - 4
浅海面雷撃の実現／九州での猛訓練	
■ 北方航路か南方航路か	III - 7
■ ヒトカップ湾を出撃	III - 8
■ 縁の下の力持ち潜水艦隊の活躍	III - 10
■ 新高山ノボレ 一二〇八	III - 11
■ 第一波攻撃隊183機、15分で発艦完了	III - 11
■ 「トラトラトラ」ワレ奇襲ニ成功セリ	III - 12
■ 不徹底だった戦果	III - 14
■ 戦列に復帰した戦艦	III - 15
■ 真珠湾攻撃の犠牲者	III - 15
■ イフの戦史・真珠湾攻撃	III - 17
日本海軍伝統の漸減邀撃作戦で十分に勝てた	
■ もし第二次攻撃で石油基地を爆撃していたら	III - 19
もし米空母を撃滅していたら／もし、ハワイ海域に留まり米空母を撃滅していれば	
■ もし真珠湾攻撃をしなければ・・・	III - 21

- 日本の運命が暗転した痛恨の一日 IV - 1
- ミッドウェー戦は戦訓・教訓の宝庫である IV - 2
- 慢心と油断・日本人の宿痾 IV - 3
- ミッドウェー作戦の目的 IV - 4
 - 歴史上初の空母同士決戦・珊瑚海海戦／
 - 二つの無理な作戦・・・アリュेशन作戦とミッドウェー作戦
- ミッドウェー作戦の経過 IV - 7
- アメリカに筒抜けだった作戦 IV - 7
- 史上空前の大艦隊の出撃 IV - 7
- 三つに分散した連合艦隊 IV - 9
- 南雲艦隊を上回っていたアメリカ軍 IV - 9
- 第一次攻撃隊のミッドウェー島空襲 IV - 10
- 山口多聞「直ちに攻撃隊発進の要あり」 IV - 10
- 赤城、加賀、蒼龍、炎上す IV - 12
- 名将山口多聞と飛龍の獅子奮迅の戦い IV - 13
- ミッドウェー作戦中止 IV - 14
- ミッドウェー海戦の敗北の原因 IV - 14
 - 戦略的な敗因
- 情報戦略の軽視 IV - 15
- ずさんな索敵計画 IV - 16
- 見張りと防空対策の不備 IV - 17
- 山本五十六と南雲部隊のコミュニケーションの不足 IV - 17
- 戦力が劣勢な南雲部隊 IV - 18
- 離れすぎた三つの艦隊 IV - 18
- 戦力集中の不徹底 IV - 18
- 余話「諸君の奮闘を謝する」
 - ・・・山口多聞司令官・加来止男艦長物語 IV - 19

第5章

ガダルカナル戦

★それでも日本軍は強かった★

- ガダルカナル戦とは何か V - 1
日米戦争の分岐点となった戦い／歴史（戦史）を忘却するものは歴史によって罰せられる／戦史を読めば自信が湧く
- ガダルカナル戦記 V - 4
ガダルカナルとはどこか
- ガダルカナル戦の経過 V - 6
- なぜ、逐次投入を繰り返したのか V - 8
逐次投入兵力と損害／現代日本におけるバラマキと逐次投入
- 一木支隊は無謀か否か V - 11
- 川口支隊・第二師団・第三十八師団の挫折 V - 13
川口支隊の攻撃／第二師団の攻撃と頓挫
- 第三十八師団も同じ運命をたどる V - 16
- ガダルカナルからの撤退 V - 17
- ガダルカナル戦の敗因と戦訓 V - 18
攻勢終末点を越えていた／陸軍と海軍の作戦計画が分裂していた／
戦略的な統合作戦がない／アメリカの統合作戦本部と日本の大本営／
希望的観測の錯誤＜アメリカの反攻時期を読み間違えた＞／
情報の軽視である／兵站の無視／世界の先端軍事技術から
遅れていた／戦艦の艦砲射撃を活用していない／
勝ったときの夜郎自大、負けたときの卑屈／
なぜ日本は意志と戦力の集中を欠くのか／現代にも続く日本の宿痾

第6章

硫黄島戦

★世界史に燦然と輝く英雄物語★

- 世界の三大玉砕物語 VI - 1
- 硫黄島の戦略的な価値 VI - 3
- 硫黄島の高い価値 VI - 4
- 大東亜戦争随一の名将・栗林忠道中将 VI - 5
- 文化人としての栗林忠道 VI - 7
- 絵手紙からみる栗林の豊かな感性 VI - 8

■ 「五日あれば硫黄島を占領できる」	VI-9
■ アメリカ軍の艦砲射撃の区画図	VI-10
■ 硫黄島戦の経過	VI-11
■ 主要な戦闘の経過	VI-12
■ 摺鉢山が陥落する	VI-15
■ 各地で激戦が続く	VI-16
■ 歩兵戦闘の権威・千田旅団の最後	VI-16
■ 最後の関頭に直面せり	VI-16
■ 栗林兵団の最後	VI-17
■ その後.....	VI-18
■ 日本人の精神力	VI-18
■ 栗林作戦を検証する	VI-19
水際撃滅作戦の放棄／全島要塞化へ・・・地下陣地の構築	
■ 思想と哲学の徹底的な教育	VI-21
敢闘の誓い／日本精神練成五誓	
■ 膽兵の戦闘心得	VI-22
戦闘準備／防衛戦闘	
■ 矢弾尽き果て散るぞ悲しき	VI-23
■ 予は常に諸子の先頭にあり	VI-23
■ 栗林中将の最後	VI-24
■ 硫黄島の戦史余話	VI-25
バロン西	
■ 硫黄島戦法の嚆矢、ペリリュー戦の中川州男大佐	VI-26

第7章

沖縄戦

★父祖達の雄々しき戦いの跡★

■ 情緒的な反戦風潮を排す	VII-1
■ 沖縄県民は日本人である	VII-2
■ 雄々しく散華した鉄血勤皇隊とひめゆり部隊	VII-3
■ 戦争とは国民と国民の戦いである	VII-5
■ 沖縄という島	VII-7
■ 日本軍の編成	VII-10
■ 日米の兵力を比較する	VII-11

■ 沖縄戦の経過	VII - 11
■ 米軍の進撃状況の推移	VII - 13
全戦線での日米の激戦が始まる	
■ 日米両軍の損失数	VII - 17
沖縄戦における全死亡者	
沖縄戦は軍民一体の戦いだっ	
沖縄県民の獅子奮迅の戦い	
■ 沖縄戦の特色	VII - 19
■ 沖縄作戦の問題点	VII - 20
■ 歴史に学び戦史に学ぶ	VII - 21
■ 嗚呼沖縄戦の学徒隊	VII - 22
■ 燦たり義烈空挺隊	VII - 25
■ 美しい摩文仁の海岸	VII - 27
■ 沖縄戦・・・エピローグ	VII - 27

◆編集後記

◆文献リスト